

享年百四十八歳にて、石窟にこもり、巖扇を掩て入定せり、牛も亦隨て死す、道士石像及木像、並鐵杖、鐵履、牛頭より出し、白玉、又其遺骨數片、今猶存せり、

〔西遊記四〕仙人

おほよその人皆才徳の事に限らず、もし長生を得んと欲せば、深山に入り、飲食を斷ち、思慮をやめ、淫事を斷し、衣服を除きて、性命を養ふ時は、下凡の人といへども、二三百歳の壽を保つべし、當時霧島山に獨りの仙人有り、其名を雲居官藏といふ、もとは武士にて、平瀬甚兵衛といひしが、聊不平の事ありて、官祿を捨て世をのがれ、此山奥に隠れて人にまみえず、其後數十年へて、霧島山に住るといふを、親屬の方へも聞へ、甥の得能武左衛門といふ人、はる／＼と霧島山に尋入り、數日尋求めてやう／＼にめぐり逢たり、其形木の葉の衣に、髮髯おのづからに生ひ茂り、人のごとくには見へず、されど武左衛門も厚く心にかけて尋入りたる事なれば、言葉をかけて近付寄り、今一たび世に返り、人の交りもあれかしと、理をせめていひしかど、更にうけがふ色無く、はや世を逃れて幾年かへぬ、近き頃は仙術もや、成就して、姓名も雲居官藏と改めたり、よそながらにも世の人に相見る事、我道の妨げなり、まして再び世に出ん事、思ひもよらず、此後はいかなる事ありとも、尋來る事なかれとて走り去れり、武左衛門も是非なく別れ歸りぬ、其後は山深く住居て、ほのかにも人にまみゆる事を嫌へり、まして言葉をかはす事などはさらに無し、山に入りて後も、今まで既に百何十年といふ上に成れり、されど行步健にて、老たるとも若きとも知れず、彼邊にては人皆仙人なりと敬ひ、飛行自在、其外種々の奇妙多しといへども、其事は知らず、略○中又肥後國球磨郡の人吉の城下より十里ばかり奥に、たら木といふ所あり、此所に吉村專兵衛といふ百姓あり、年六十計の時、家業不如意にて世の中うとましく、ふと仙術に志して、此たら木の山奥に入れり、城下だに深山の奥にて、他所より見れば、仙境のごとき地なるに、又それより十里も